

## 中学生のLINEの使い方とトラブル被害

— 自尊感情、インターネット・リテラシーの認識、保護者の制限との関連から —

有 村 彩 未

### 問題と目的

「LINE」は、10代を中心に利用され、特に、中学生は、LINEでのトラブルが増加傾向にある（神戸新聞NEXT,2014年,9月1日）。LINEの「既読」によって、「メッセージを読んだのに返信をしないと相手が気分を害するのでは」という不安から、返信が義務になり、LINEを手放せなくなるという報告がある（『読売新聞』2013年6月28日「LINEのトラブル被害」）。田山（2011）は携帯メール依存者の傾向として、神経症傾向、自尊感情の低さを挙げており、携帯メール依存は、自尊感情の低さによって、相手からの評価を気にすることから生じると考えられる。相手から嫌われることを怖れて携帯メール依存になることは、LINEが手放せなくなる点と共通であると考えられる。携帯メールとLINEが同様の役割をしているとすると、LINEにおいても自尊感情が、手放せなくなる要因となっていると推測できる。また、LINEトラブルとして、個人情報漏洩が学校現場で多く報告されている。このトラブルは、インターネット・リテラシーの匿名性の意識が関わっていると推測できる。高田（2009）は、匿名性のレベルがあることを指摘しており、このレベルが低いと、個人情報を公開することに抵抗がなく、情報の扱いが粗雑になることが推測できる。また、匿名性が確保されていることで、自分の発言への責任が薄れ、軽はずみな発言をすることが予想される。このように、匿名性や情報の扱いを包括するインターネット・リテラシーの認識は、LINEの使い方に影響を与えており、トラブルにも影響を与えていると想定できる。また、トラブルを抑制する要因としては、保護者が子どものLINE使用を制限することだと考えられる。しかし、LINEを使うことに関しての保護者の使用制限の有効性について検討した研究はほぼない。

よって、本研究では中学生がLINEをどのよう

に使っており、どのようなトラブルがあるかを明らかにすることを第一の目的とする。また、LINEの使い方とトラブルの関連は、自尊感情、インターネット・リテラシー、保護者の制限によって影響を受けるのかを、これら3変数を導入した交互作用モデルによって検証することを第二の目的とする。

### 方法

**研究協力者** A県の市立中学校の生徒、回収したデータは481名、分析対象としたLINE利用者は225名。

**調査日時** 2014年10月～12月

**手続き** 質問紙調査の実施や内容については、県のスクールカウンセラーを介して中学校の担当者と調整を行った。

**質問紙の構成** ①フェイス項目は学年と性別。②東京都版自尊感情尺度（伊藤・若本,2010）22項目を用いた。「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。③LINEの使い方尺度12項目、予備調査を基に作成した。前述と同様の4件法。④LINE使用の頻度は、「1日に何度も」、「1日に2～3回程」など、計5つの中から1つ選ぶものとした。⑤LINEを使っている動機は、総務省（2014）の「情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」を基に作成した。14項目あり、当てはまるもの全てとして複数回答を求めた。⑥インターネット・リテラシー尺度は、深谷・江端（2014）の「SNSで個人情報を公開することの意識」を参考に作成した。9項目あり、前述と同様の4件法で回答を求めた。⑦保護者のLINE使用への対応尺度は、高橋（2006）の携帯電話の使用に対する家庭のルールを、LINEを使用する場合に変更したものを使用した。8項目あり、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。⑧LINEトラブル被害尺度

は、予備調査を基に作成した。15項目あり、LINEを使っている経験したことから、自分が誰かにされたことを「ある」と「ない」の2件法で回答を求め、されたことにおいて「ある」の場合に、4件法「とてもつらかった」、「つらかった」などの4件法で回答を求めた。

### 結果と考察

**分析** 各尺度に対して因子分析を行い、合成変数とした。自尊感情尺度は「自己判断への信頼」「他者との関係性の中の自己」「自己の価値」の3変数、LINEの使い方尺度は「オン友とのやりとり」「リア友とのやりとり」「画像データのやりとり」の3変数、インターネット・リテラシー尺度は、「個人情報の軽視」「匿名性の確信」の2変数、保護者のLINE使用への対応尺度は、「制限」「指導」の2変数、LINEトラブル被害尺度は、「個対個のトラブル」「オン友による拒否」「さらしトラブル」の3変数が得られた。

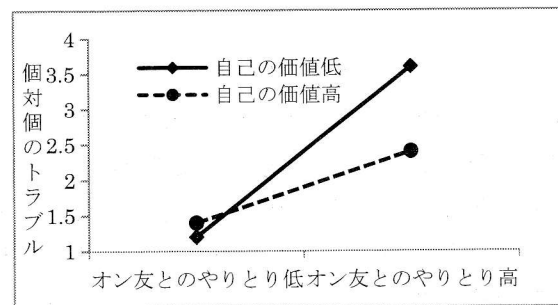
どのようなLINEの使い方とLINEトラブル被害があるか、明らかにするためそれぞれ記述統計を行った。また、交互作用モデル検証のために、LINEの使い方を独立変数、LINEトラブル被害を従属変数とし、これらに調整変数として、自尊感情、インターネット・リテラシー、保護者のLINE使用への対応を用いて2要因分散分析を行った。

**LINEの使い方の記述統計** 「オン友とのやりとり」が1年生77名、2年生71名、3年生77名。「リア友とのやりとり」が1年生67名、2年生84名、3年生74名。「画像データのやりとり」が1年生77名、2年生71名、3年生77名。それぞれのLINEの使い方の人数に差は見られず、LINEを使う人は、偏りなく様々な機能を使っていることが分かる。

**LINEトラブル被害の記述統計** 「個対個のトラブル」が1年生75名、2年生68名、3年生75名。「オン友による拒否」が1年生71名、2年生65名、3年生73名。「さらしトラブル」が1年生74名、2年生67名、3年生64名。各トラブル被害の人数に差は見られなかった。これは、LINEを使っている人は、悪口や拒否されること、個人情報の漏洩などのトラブル被害の性質に関係なく、さまざまな被害に遭う可能性があると考えられる。

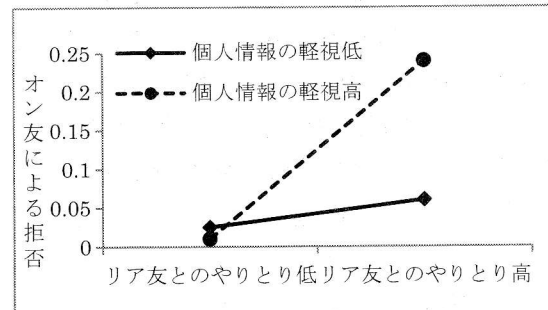
**調整変数が自尊感情の場合** LINEの使い方

「オン友とのやりとり」を独立変数、自尊感情の「自己の価値」を調整変数、「個対個のトラブル」を従属変数とする2要因分散分析を行ったときのみ、有意な交互作用が得られた ( $F(3,212)=3.98, p<.05$ )。



**調整変数がインターネット・リテラシーの場合**

LINEの使い方「リア友とのやりとり」を独立変数、インターネット・リテラシーの「個人情報の軽視」を調整変数、「オン友による拒否」を従属変数とする2要因分散分析を行ったときのみ有意な交互作用が得られた ( $F(3,207)=3.51, p<.05$ )。



**調整変数が保護者の制限の場合** LINEの使い方3変数を独立変数、保護者の制限2変数を調整変数、LINEトラブル被害3変数を従属変数として2要因分散分析を行ったが、交互作用は一つも見られなかった。

交互作用の検証により、自己価値が低いことが、対人関係への苦手意識につながり、直接会わずに話すことができるオン友とのやりとりが促進され、オン友とのトラブルが多くなっていることが明らかになった。また、オン友とのやりとりが多い人は交友関係が広く、オンラインの友人も多くいると考えられた。しかし、個人情報を軽視していることで、オンライン上の友人から拒否されることが増加していることが分かり、LINEの使い方とトラブルの関連に影響を与える要因を明らかにできたと考えられる。